

「仲間になる」

企画立案した委員会の責任者として後には引けず、僭越ながら、まずは私が書かせていただきます。

これまでに周囲の先生、先輩から教わったこと、今振り返って大事だったと強く感じることをいくつかお伝えしたいと思っています。キャリア教育の文脈でよく使われる、「基礎力」とか「基礎的・汎用的能力」のようなものと個人的には位置づけています。

今回はそのひとつ目として、「仲間になる」ことについて取り上げたいと思います。学会は、研究をするということについて多大な学びができる場です。なかでも、私が大きな学びができたと感じるのは、人の発表や講演を聞いた時よりも、自分が発表した時です。最初はいろいろと指摘され落ち込むこともありましたが、今となっては、それが自分の研究をする力の基礎を形成してくれていることに疑いは持っていません。

しかし、実は初めて学会で発表した時のことは、あまりよく覚えていません。よく覚えていないのですから、学びなんて何もなかったと言うべきでしょう。ところが、関連する学会や研究会で発表を続けているうちに、会員の方々、諸先輩に私の存在を覚えてもらえたように思います。そうすると、がぜん「ツッコミ」が増えてきて、学びが飛躍的に増大しました。

このような私の経験からですが、学会で「学ぶ」ためには、周りから「仲間」と認識してもらうことが不可欠だと思います。学会は学校と違い、「教える-学ぶ」という役割関係はありません。役割がない中で学びを増大させようとするのですから、仲間として認識してもらうことがとても重要だと思います。そして「仲間」になるには、研究発表や議論への参加を通して、他の会員と知についてのギブ アンド テイクを実践する必要があるでしょう。たとえ若手であっても、単に会員名簿に名を連ねていることや、研究発表の聞き手であるだけでは、仲間として認めてもらいにくいと思います。良い意味での「大胆さ」「あつかましさ」も必要だと思います。「学会」は **society** の訳ですが、その名が示す通り、各員の研究を通じた積極的参加が不可欠な集団といえるでしょう。

本年度は上越教育大学で大会が開催されます。このチャンスをいかし、ぜひ仲間に加わってください。

(南山大学 浦上昌則)